

『愛され王子の秘密の花嫁』

著：森本あき

ill：Ciel

「本当にありがとうございます。感謝してます」

しばらく頭を下げつづけてから、体を起こした。やさしい表情で見守ってくれているメイソンの顔を見たら泣きそうになったけど、ぐっと涙をこらえる。

そんなことないよ、とか言わずに、ちゃんと聞いてくれるメイソンを心から尊敬する。

この人はとても心が大きい。

「これからはこの国の言葉を教えてもらって、ちゃんと働いて、盗んだ食料のお金を返して、メイソンにも恩返しをしたい。どうやったら恩返しができるのかわからないけど…」

こんなに広い部屋を与えてくれるようなお金持ちに、いったい、何ができるというのだろう。

「恩返しはヒノモトのことを教えてもらえればいいよ。ぼくの研究が進む。そうだね。ぼくはルルに言葉を教えて、ルルはぼくにヒノモトのことを教えてくれる。これでどう？」

「え、そんなのでいいの？」

「いまこの国ではルルにしかできないことだよ。ルルは幸運だって言ってくれたけど、ぼくだって幸運だった。ルルを最初に見つけられたんだから。ルルの感謝の気持ちはよくわかったから、冷めないうちに食べて」

メイソンがお盆を指さした。

「俺、猫舌なんだ」

「猫舌！ 読んだことしかない言葉を発音してもらえると、とても助かる。ほらね、ルルはきちんと恩返しをしてくれてるよ。そろそろ論文を發表しようかと思っていたんだけど、ルルのおかげでまったくちがう方向性にできそうだ。ありがとう」

「お礼を言わないで！ こっちの方がありがとうなのに！」

ありがとう、なんて言ってもらえるような人間じゃない。

「それは、ルルから見たら、ってだけで、ぼくは本当に感謝しているんだよ。だから、お礼の言葉ぐらい素直に受け取っておきなさい。ありがとう」

「…どういたしまして」

メイソンがそう言うなら、素直に受け取りたい。

「どういたしまして、って言うの？」

「お礼を言われたら、そう返すんだ」

「なるほど、なるほど。ほら、ルルはすごい」

「ヒノモトに生まれたってだけだよ？」

そんなにすごいと言われるものでもない。

「ぼくだって、ただこの国の王位継承者として生まれただけだよ。生まれは選べないからね。ほら、また話しちゃった。だめだね、冷静になれてない」

メイソンが、ポン、と自分の額をたたいた。

「ここにはいるけど、口は出さない。食べて。おいしいよ。…おいしいはずだよ」

「これから食べるのに自信なさそうに言わないで！」

だめだ、おかしくて笑ってしまう。

そうだ。メイソンに会ってから、たくさん笑っている。

それが嬉しい。

すべて、メイソンのおかげ。

「ごちそうさまでした」

ルルは手を合わせた。

「それは食事が終わるときに言うんだ？」

「そう。ごちそうをありがとうございました、なのかな？ よくわからない。研究者でも、そういうのは知らないの？」

いただきます、にも驚いていた。

「ヒノモトの民と食事した人がいないから。鎖国してなかったのは二百年以上も前のことだし、そのころにヒノモトにいた人はいま生きていないよ」

それもそうか。

「どうだった？ おいしかった？」

メイソンが心配そうだ。ルルが何も言わずに食べたからだろう。

あまりのおいしさに、ガツガツ食べてしまった。ひさしぶりのちゃんとしたごはん、それもヒノモトの食事。ゆっくり味わおうと思っていたのに無理だった。ごはん、おかず、お味噌汁、ごはん、おかず、お味噌汁、海苔はごはんとは別に食べるのが好きなので、そうやって。気づいたら、全部なくなっていた。

「すっごくおいしかった！ 本当にごちそうさまでした。ありがとう」

「よかった…」

メイソンがほっとしている。

「ところで、海苔ってごはんを巻いて食べるんじゃないの？」

「これは味がついている海苔だから、そのまま食べてもおいしいし、俺はそのまま食べるのが好き。味がついてない海苔は醤油をつけて。でも、それもそのまま食べるかな。ごはんと海苔は別々がいい。そこは個人の好みだよ」

あれ、体が熱い。ぽかぽかしている。

ごはんを食べて、元気になったのかな。これまでは体温も低くなっていたのかもしれない。が

んばって熱を上げているんだろう。

エネルギー源ってすごいね。

「そうか。やっぱり、その国に住んでいる人に話を聞くとちがうね。ところで、いろいろと質問をしてもいい？」

「どうぞ」

あれ、なんだろう。

…熱い。すごく熱い。

もしかして、風邪でも引いた？

ルルは病気になった記憶がない。健康診断以外で病院にかかったこともない。体が丈夫だったのも、一人で生きていける、と思い込んでしまっていた要因のひとつだ。

貧血などのちょっとした症状はあっても許容範囲内だし、それだけガリガリにしては数値もまともだね、といつも言われていた。

だから、こんなふうに分が熱いのもはじめてで、すごくとまどっている。

首筋を触ってみたけれど、特に熱が出ている感じでもない。そこが熱いというよりも、体の中が熱い。

おなか？ もっと下？

どこが熱いんだろう。

「質問の前にちょっと待ってね。片づけてもらうから」

メイソンの声が遠い。ルルにわからない言葉に切り替わったから、とかじゃなく、すごく遠くから聞こえてくるような…、ちがう、メイソンの声がぼんやりしている。

「あの方たちは…」

声を出すのもしんどい。

あれ？ 本当にどうした…？

「ああ、使用人だよ。何か頼みたいことが…、そうか、言葉を話せないんだったね。早急にそこから解決しよう。ルル？」

「あの…、俺…、なんか…、変…」

ドン、と体の内側から何かが放たれた。そんな気がする衝撃が襲ってきた。

ルルはソファに倒れ込む。

「ルル？ どうしたの、大丈夫…」

メイソンが心配そうにルルをのぞき込んで、額に触れた。その瞬間、慌てて手を離す。

「オメガ！」

メイソンの声が少しずつはっきりしてきた。さっきまでのような霧がかかった感じではない。

なんだろう。甘い匂い。

…とても甘くて…誘われる…。

「嘘だよな？ ルル、オメガなの？ 全然わかんなかった…やばい、ヒート…」

オメガ？ ヒート？

さっきから、いったい何を言ってるんだらう。こっちの国の言葉かな？ だったら、わからなくてもしょうがない。

「ちょっと、ぼくは部屋を…ルル！」

ルルは起き上がって、メイソンにしがみついた。

甘いものが食べたい。甘いものがほしい。甘いものが足りない。

全然、足りない。

「離して…、ぼくはアルファなんだよ！」

「アルファ…？」

もしかして、アルファとかオメガって数学に使うやつ？ 中学校は行ってないけど、聞いたことはある。

それがルルとなんの関係があるんだらう。

「このままだと…おたがいに困ることに…」

「甘い…」

ルルはメイソンの手を舐めた。

うん、甘い。

「ホントに…やめよう…？ ぼくは…ルルとは…いい関係でいたい…し…ヒノモトの…ことも…」

メイソンの言葉が途切れ途切れなのは、途中で吐息のようなものがこぼれているから。その吐息すら、甘く感じる。

息が甘いってすごいね。

でも、まずはこの手。

目の前にある手。

「すごく甘い…」

メイソンの指先を口に含んで、ちゅぱちゅぱと吸う。

キャンディーみたいでおいしい。メイソンの肉体を食べたいとは思わないけど、肌の表面にとっても魅かれる。

「ルル…だめだって…」

「俺…、甘いものに…飢えてるみたい…」

体の熱はまだある。内側でドクドクと音を立てて渦巻いているみたいに感じられる。

それでも、具合の悪さはなくなった。さっきみたいに、自分がどうなるのが怖い、といった感情もない。

ただ、体が熱いだけ。

そして、メイソンが甘いだけ。

指先を離して、メイソンの体に手を這わせた。

脱がせたい。洋服が邪魔。

メイソンは今日も白い服を着ていた。白いブラウスに白いズボン。体にぴったり沿ったそれ

は、とてもよく似合っている。

絵本の中にいる王子様みたい。

そういえば、絵本の中の王子様は金髪で青い目をしていた。それは鎖国するよりずっと前にヒノモトに入ってきた本で、図書館でしか読めなかったけれど、外の世界には本当にこういう人がいるのかな、だったら見てみたいな、とあこがれていた。

図書館に行く時間なんてなくなって、すっかり記憶から消え去っていたけれど、メイソンはその絵本の王子様に少し似ている。

かっこよくてやさしいところが、特に。

ブラウスに手を滑らせながら、どんどん上に移動していく。メイソンの体はちゃんと筋肉がついていた。筋肉も贅肉もないルルの体とは大違い。

そういうところも甘く感じるのかもしれない。

首筋はしっかりしていて、長めなのがセクシーだ。メイソンは、ルル…、とささやくように呼ぶばかり。ぎゅっと唇を噛んで、眉間に皺を寄せて、まるで何かに抵抗しているように見える。

ルルはメイソンの唇を触った。メイソンが小さく吐息を漏らす。

それがとても甘そうで。

これまでで一番おいしそうで。

ルルはメイソンの唇に噛みついた。もちろん、軽く。メイソンの体を傷つけないわけじゃない。

甘くておいしいものを舐めたいだけだ。

うん、おいしい。

もったいないから、ゆっくり食べよう。

ルルはすぐに唇を離す。

「ルル…だめだよっ…」

メイソンの声が低くなった。

「ぼくは…かなりの耐性をつけるように努力して、それに成功して、普通のオメガの誘惑には負けないはずなのに…どうして…」

メイソンはルルの頬を触る。

ビリリッ。

電気が走るような感覚がそこから広がった。

「まさか…初ヒート…？」

「ヒートって…何…？」

メイソンの唇が動いている。あれが食べたい。

「ヒートは…んっ…」

ルルはメイソンの唇に吸いついた。

甘い。甘くて、体が痺れる。

「ルル…ホントに…っ…」

その甘さがもっと欲しくて、ルルは何度も唇を吸う。ちゅぱ、ちゅぱ、と音が漏れた。

「ルル…っ…！」

メイソンの声が悲鳴に近い。

いったい、どうしたんだろう。メイソンはおいしくないだろうか。

こんなに甘いのに。

メイソンが、ぐいっ、とルルの体を離した。大きく深呼吸をして、ルルを見つめる。

「いいか、ルル。うちにはベータの医者がある。ルルのヒートにまったく影響を受けないし、ヒートが収まる薬もある。だから、ちょっとここで待って…ん…っ…」

メイソンの言っていることはまったくわからないけれど、メイソンからの甘い匂いが少し減ってしまった。

それが残念で、ルルはメイソンの唇を少しだけ強く吸う。

表面だから悪いのかもしれない。中はもっと甘いかもしれない。

あの甘さが欲しい。

甘いものにはそんなに興味なかったはずなのに、いまは甘さを体が求めている。

するり、と舌を中に入れた。あったかくて、気持ちいい。

そして、思ったとおり、すごく甘い。

「んっ…んっ…」

夢中で舌を動かした。吐息もこぼれる。

メイソンがルルの舌をちろりと舐めてきた。ルルも舐め返す。

舌を擦り合わせて、離して、また触れて、離して。

甘くて甘くて、その甘さに頭の中が真っ白になる。

「ルルが…悪い…」

唇が離れて、メイソンがそうささやいた。

「我慢したのに…、ルルを傷つけないように…、でも…」

メイソンの目の奥がきらりと光る。これまでにはない輝き。

それに吸い込まれそうになる。

「もう無理だ」

メイソンがルルを抱えあげた。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>